



# TAKAOKA CRAFT COMPETITION 2019/33rd

曖昧なものほど味わい深い。  
伝統的な技術に、新しい発想を。

昨年に引き続き「抱擁 -Embrace-」をテーマとした第33回「高岡クラフトコンペティション」。今回は1082点の作品と向き合い、例年より深い議論が展開されていた。曖昧さの中で埋もれそうになっているもの。それは複雑だからこそ味わい深いものであるという。伝統的な技術と新しい思想が組み合わさった魅力ある作品を見つけ出した審査員たちの目を追った。

## — より議論を深め、 作品の良さの断面を見る。

33回目を迎えた高岡クラフトコンペティション審査会は8月1日(木)2日(金)の2日間に渡って行われた。例年より1週間遅いスケジュールであるが、ちょうど高岡七夕まつりの時期と重なっており、街中で多くの短冊が笹の葉に揺られている。会場には272点の作品種、総合計1082点の作品が並ぶ。応募者数は昨年を上回る227名の応募者であった。審査員長は手工業デザイナーの大治将典氏。

大治：今年の賞に関してはグランプリ1点、準グランプリを2点設け、全員で決めることにしました。どの作品が最後まで粘ったのか、議論を深めて皆

で選んだものももう少し見えた方が有意義だと思ったからです。優秀賞(審査員賞)は各々の視点で選んでもらいたいと思います。

その他の賞は奨励賞が金属(市長賞)・漆(商工会議所会頭賞)から各1点、地域特別賞は市内出品者から1点、計12点。

大治：テーマは昨年に引き続き、「抱擁 -Embrace-」2。プロダクトとアートの間、曖昧で判りにくいものが今目立ちにくいなと思っていて。曖昧なものは複雑。複雑なものって、実はすごく味わい深い。そういうものの良さの断面が見られれば良いなど。それを、誠意を持って「私たちはこれを選びました」と伝えたいと思っています。

## — 各審査員の審査基準、 過去の実績者とのその後。

安藤：僕は今年で5回目の審査会なのですが、多治見でギャラリーをやっている過去の受賞者の方々はよく来てくれます。会話もするし、プロとして活躍している人も多いので嬉しく思います。でも賞を獲ってしまうと中々連続で出してくれない。勿体ないし、今後の課題だと思います。審査基準は「カテゴリーの中間のところ」「拾われにくいもの、見つけにくいもの、見えにくいもの」というところを見つけられたらと思っています。

下尾：地元でクラフトコンペに携わらせていただくことが光栄です。ここで見出しただいて、今自分の仕事

にも繋がっているのが、皆さんのものづくりを先入観なく、良い悪いを先に判断せず、作者の意図を拾っていただけらと思っています。

**大治**:複雑だけど味わい深い、何だか判りにくいところを切り、こんな感じでしたよと審査で見せてあげられたら。

昨年から高岡クラフトコンペはガラッと変わって、今まで拾わなかったものが拾われて面白いなと思っていますが、気になっているのは、本当に日常生活で使われるものが少なくなったところ。今回は「日常の、判りにくいけれど、こういうところに気を使ってこんなプロダクトを作ったんだ」と見ていければ。**小林**:前回のコンペが終わって今回の応募締切までに、もっと自分が宣伝すればよかったなど。一つ提案なのですが、応募用紙を全国の工芸店や生活用品店に送ることを積極的にやったほうが良いと思っています。もうちょっと応募する人がいるはずなんです。

**大治**:そうですね。実行委員会サイドでは繋がっていない、僕たち審査員の小売店さんとの繋がりを活かして声かけを積極的にしていけるはず。

**小林**:400種類くらいあると選びがもありますね。しかし、今バツと見たところ「作者の自己模倣」のような作品もあって、そういうのは残念です。昨年から繋がった事でいうと、グランプリを獲った方の弟さんがよくお店に来てくれて、交流も生まれています。今年も楽しみながら審査したいと思います。**高橋**:長いこと携わらせていただいで、今年も夏が来たと感じます。審査基準は一貫していて、メディアとして、より多くの人に伝えるべきものは何かという観点で選んでいます。クラフトコンペで良いものや面白いものがたくさん出て来ていますが、紹介しても出口がないといけません。先日入ったお店で、過去受賞した作品が、使われていてとても幸せな再会をしました。リアルな場でも繋ぐようなことを増やしていきたいので、昨年とは違う視点でも

見たいと思います。

**寺山**:今年2年目なのですが、技術は当たり前として、その中に個性が入っているようなもの、語りかけてくるようなものをピックアップしていきたいと思っています。

## 一 ものを見る眼。審査員の作者への想い。

各審査員が30枚の票をもち、1時間半の1次審査開始。終了後中間で見落としているものはないか、審査員全員でもう一度全作品を見ていくことに。ものとしてはいいが…、発想はいいが…と声が出る。審査員たちは多くの作品に触れているので元ネタはすぐに気付く。「そうだとすると、このコンペで視点が変わったのか?」等の話し合いがあちこちで行われている。繊細な仕事ほどしっかりと見て、その中で現れてきた荒さが意図的かということまでも納得いくまで議論をする。素材の意味、仕事の美しさ・丁寧さ。ありとあらゆる視点からだ。「辛いな、いれてあげたいんだけど」の意見が出ることも少なくない。追加3票を持ち、2次審査へ。作品展示方法への提言もありながら、87種325作品の入選が決定した。**大治**:ベクトルは良さそうなんだけれど、筋力がなかったりする。5票得た作品も、1票の作品も入選作として同じになってしまう。本当は惜しかった点を伝えてあげたい。「ものの見方の解像度をあげる」。そう、審査員たちは言う。

## 一 作品はどのように変化し、作者はどこを残したか。

2日目の朝。昨日の入選作品をもう一度全員で見回す。見逃したものは、納得していないものはないか。ここまで考えてくれる審査会が他にあるのかは知らないが、この審査結果が作者に与える影響までしっかりと議論をする。**安藤**:作り手は常に進化しようとする。

進化の過程では、誰にだって駄作もある。形を変えてきただけでも立派。普通だったら昨年のバリエーションで出してくる。

作者が作品を作り、応募するまでにどれだけの葛藤を抱えるか。審査員たちは誰よりも知っている。その後、一人12票を持ち、入賞作品の選定へ。1票以上入ったものが28作品。それらを集め、並べ直す。急に作品の表情が変わってくるのが不思議だ。作品の視点が明確になる。その中から各々3票を持ち、グランプリ、準グランプリの投票へ。各自2票まではざっと決まるが、あと1票がなかなか決まらない。

**寺山**:会話をするためにこれに入れたい。作品への議論を深めるために、他の審査員の解釈も聞きたいから、審査員たちはその材料の特徴から製作方法、提案までも話し合う。

長く議論されたのは『mozaic』、『sou』、『bottle origin』、『凧』、『竹小筥』など。**高橋**:『bottle origin』はアップサイクルですよ。

**大治**:元の瓶をちょっと感じるよね。他の人が作っても同じように良いと思うかと言えば、この良さはこの人のセンスだと思う。

**大治**:『凧』は糸面をちゃんと取るべきなんですよ。同じ材料で違う組み方にしたものがあれば面白そう。

**寺山**:『mozaic』は熱でくっつけているんだと思うんですが、これは本当にいい。抱擁している感じ。機能が模様を兼ねているのが好き。

**小林**:織りと縮絨にまつわる高い技術は伺えつつも、少し、もざっとしている気がします。

**大治**:『sou』は自分でつけないからどうしても目に止まりにくいんだけど、これはすごく面白い。元の紙をそのまま活かしてこよりにして、非常にニクイというか、ここで止められる手もいい。実際につけて、立体になるといい。**小林**:素材の使い方がいいですね。

**下尾**:素敵ですね。繊細だからつけるとドキドキしますけれど。完成度、曲線、単調さ、難しさ。様々なキーワードが出る中で、審査は困難を窮める。

**大治**:まとまってきて相対化してくると、足りないものが見えてくるね。

**安藤**:足りないというより、この技術を見せたいという欲が目立ってしまう。グランプリ候補は『凧』、『竹小筥』、『sou』の3作品に絞られた。

## 一 選ぶことで示すメッセージ。

**大治**:昨日の見た段階では僕は『竹小筥』がグランプリか審査員賞にしたいくらい好きだった。別に新しい作り方ではなく、伝統的な作り方ですごく丁寧な仕事。でも用途が違って見えるし、フォルムも可愛さもいい。日常使いのイヤホンや薬を入れてもいい。そこがまでの工芸からバージョンアップしていると思う。値段もいい。**安藤**:これは伝統工芸展でもいい?

**大治**:伝統工芸展だともっと too much な事をしないとイケない。でもそれだったら欲しくない。ここでちょうどいいんですよ。

**小林**:デザイン的に優れている視点でいうと『sou』なんですよ。

**大治**:確かにね。これが本当のゴージャスかもしれない。

**下尾**:作るときにゴミも出ない。これだけで完結する感じ。

**大治**:ああ、すごく良く見えてきました。日本人が選ぶ感じがする。

**下尾**:この長さもバランスが良くて素敵だと思う。

**小林**:ゴージャスという言葉はアップデートしてくれる作品。純度が高いですよ。

**寺山**:今年はいいいジュエリーをたくさん見たんですよ。だから引っかけているのかもしれない。これはコンテンポラリージュエリーかというところじゃない。でも、素材の特性を活かして技術

も昔のものを使って、元が見える新しいものを作っている。そこがうまいですよ。

**安藤**:多少未完成でも新しいものがあります。

**小林**:『凧』は完成度という意味では細部に雑さがあります。

**高橋**:造形的にはいいですよ。

**小林**:造形的にはいいです。ただ、接地面のエッジがチップしていたり、接合部の接着剤が見えていたりするところが…。**大治**:これは新しいお店に並んでいたらいいですよ。

**高橋**:そうですね。映えますよね。

**大治**:グランプリを決めましょうか。言い残したことはないですか?

**小林**:アートではなく、クラフトだから仕上がりが問われると思うんですよ。

**大治**:では挙手をお願いします。『凧』に高橋審査員が、『sou』に5名の審査員が手を挙げる。

**大治**:グランプリは『sou』に決定です。(一同拍手)。

## 一 クラフトコンペが見出したものとは何か。

準グランプリの選定へ。『凧』、『竹小筥』、『夜盗』、『bottle origin』の4作品が候補に挙がった。

**大治**:クオリティ的には圧倒的に『竹小筥』、『夜盗』が高いですね。一人2票ずつで決選投票をしましょうか。

**小林**:準グランプリは1つでいいんじゃないですか?

**大治**:ちょっと議論を尽くしましょう。**安藤**:前はコンテンポラリーという、技術ではない新しさを見出す部門があった。それをなくして新しい方向性を出そうとしているのに結局完成度が高いものばかり選ばれるのはつまらない。

**小林**:でもクラフトコンペですからね。**安藤**:いやいや。31回で、ある程度限界がきたから新しいところにかけていこうと昨年撤廃した経緯があるんです。準グランプリを完成度の

高いところだけで選ぶのはどうか。

**下尾**:小さな作品の完成度が高くても、大きな作品の完成度が低いというのは違う。木の仕事をしていると、絶対エッジって落とさなくてはイケないし、ノコが入ったものをそのまま残してしまうとか、『凧』はその雑さが準グランプリにするには抵抗があります。

**小林**:これがモニュメントだったらいいんですけどね。

**寺山**:割れてくるのではないかと、貼り合わせているのなら方角を揃えてやるとか。でもこれはあっちこっちに向いている。

## 一 準グランプリ、そして各賞の選出へ。

**大治**:これは準グランプリ2点は難しいですね。1点にしますか?安藤さんが言うメッセージが弱くなるっていうのは納得できます。

**小林**:『竹小筥』、『夜盗』はある意味両極端でどちらも評価できる。『竹小筥』は完全な手仕事で、素材が持つ色やテクスチャを味わう。『夜盗』は原型製作を機械で行い、その後铸造と加飾という手仕事の融合で良さを出している。

**安藤**:それは見えにくいよ。準グランプリを1点にして、例えばSDGs賞等を作った方がメッセージとして伝わるのではないか。完成度だけで選ぶとこうになってしまうから。

それぞれの作品を審査員が何度も見直す。手に取り、あらゆる角度から、作品の周りの空間まで。作品選定からまた見直し、お昼をはさんで再開することになった。

**大治**:では準グランプリを決めましょうか。一人1票で。

1票が『凧』に、5票が『竹小筥』に入り、準グランプリは『竹小筥』に決定。

**大治**:技術的には昔からの工芸の手法で作られているけれど用途転換や形状に工夫があって持ち歩きたくなる作品

です。現代にあっても使える。ただ用を満たすだけでなく味わいを持っているのがちゃんと自分の心に響く日用品になっているのがいいと思いました。目打ちを変えて上下区別がつけられるようになっている。高度な技術でも目を引く可愛らしさもあります。

**安藤:** 素材を変えて色を表現しているところもいいですね。技術力が見えます。

優秀賞は各審査員によって見いだされたものが選ばれた。

**安藤雅信賞**は『I 型鋼のテーブルカッター』。

**安藤:** ガムテープのテーブルカッターをずっと欲しいと思っていて。これはズルズルと動かないのですぐ使えるなど。あったら便利なもの。デザインは改良の余地はある。刃の部分が今2つになっているけれど、逆にいうと既製品の刃も使えるので取り換えもできるし、長く使えて壊れるところがほぼない。価格だけもう少し安いといいねと思います。

**大治将典賞**は『重箱(3段)』。

**大治:** まず桐箱屋さんがどこも次の商品を作っていない現状がある中で作っていること。構造的にすごく考えられて作られていて、小さくなり、重ねられてちゃんと重箱に使える。下がすぼまって収められる箱は結構あるけれど、これは収めた時にも綺麗で蓋がきちんとはまるようになっている。スタッキングをした時の姿も美しいなど。価格もこなれていてとてもいい。桐なのでどこまで使えるかは心配ですが、そのぶん軽いですね。

**小林和人賞**は『4LEGS』。

**小林:** 最初見た時に好感を持つと同時に、すでに同じようなものが発表されているかもしれないという不安もあった。でもやはり見逃せない魅力があるなどと思って。脚だけでできている潔さと、使っていくうちの経年変化も許容するのではないかな。乾燥と湿気の差が大きいところで使われてクラックが入っても逆にかっこいいんじゃないかなと思います。それすらも抱擁する。

このように構造材としては使いにくい荒々しい材料を使っているところもアフリカとかの一刀彫りのツールのようなプリミティブな魅力がありましたね。シンプル!

**下尾さおり賞**は『水紋盆』。

**下尾:** 最初から決まっていたね。重くて使いにくいだろうとかマイナスの部分もあるけれど、それも含めてそれでもそばに置きたい作品。もう少し使い勝手が良くなる作りかか、ちょっと変える所はあるかもしれないけれど、これはこれの使い勝手が悪い「良さ」があると思うんです。作者の力の抜き方や素材に任せられた感じが見える曖昧さがいいなと感じました。表情が一つ一つ違ってくるのも面白く、クラフトの完璧じゃないところの良さが出ていると思いました。これはとても素敵! 上に乗せるものを映えさせてくれると思う。**高橋俊宏賞**は『凧』。

**高橋:** 配置場所を移動すると作品としての存在感が浮き上がってきました。荒いところはありますが、独特の提案でこのフォルムで、ツールでありながらオブジェ的な意味合いもある。空間の質を変えるような造形的な力強さを感じます。作品名も海の揺らぎを表現しているような詩的な感じがします。材を違う木で組み合わせてもいいかもしれないし、作品としてこれから広がる予感がします。今までなかったものをどれだけ掬い上げるかが基準だったので、これにしました。

**寺山紀彦賞**は『Border Weight』。

**寺山:** 最初から可能性があるものをピックアップしたいと思っていて、この作品は完成されているとは思わないんですが、フォルムはとても美しいのでそれをもうちょっと活かして欲しいと。ペーパーウエイトのような小さなものでなく大きくしたらもっと対比が生まれると思います。まだまだ展開できそうな作品ですね。**金属作品から選ぶ市長賞**は『夜盗』に決定。

**大治:** これは原型を3Dプリンターで作っています。

**小林:** 中は緑青ではない方がいいかもしれない。

**下尾:** その方がものが入れやすい。食べ物も入れられますから。

漆作品から選ぶ商工会議所会頭賞には『漆変塗酒器』が。

**小林:** 少し古臭いとされる技法を使って気持ち悪さに転ぶギリギリのところまで抑えている感じが良かった。

**安藤:** 酒器と限定しないで置いておいてもいいし、花を生けてもいい。

**下尾:** 口のところをなくして、横にしてお皿でもいいなと思います。

**安藤:** アルブの彫刻みたい。彫刻シリーズを展開してもらえたら面白いですね。

**小林:** 機能を持たせなくてもあるだけでいいんだと思います。

審査員が一番多く議論した『bottle origin』には審査員特別賞を贈ることで一致した。

**大治:** レディメイドであるものをこの技術によってあえてここで止めている。その表現に可能性があると思います。これがSDGsになるかもしれない。あやういけど魅力を感じます。

**安藤:** これをまたさらにリサイクルするかもしれない。

**高橋:** リサイクルのもう一つ上の考え方の、アップサイクルですね。

**安藤:** この思想を何らかの形でもっと発展させて、続けて欲しいと思います。高岡市内出品者に贈られる地域特別賞には『マル氷』が選ばれた。

**大治:** 形もいいですね。

**寺山:** 全然空気穴がないから熱を持たないっていう想定かもしれない。可愛いですね。

**安藤:** 上の部分を黒にしているのもいい。

今年も夏が始まって終わる。審査員が選んだことで伝えたかったメッセージも、選ばなかったことで伝えたかったメッセージも、9月開催の高岡クラフト展で直接受け取ってもらえたらと願う。